序文

福島知己

おそらく本論集は、日本ではじめて実現した、シャルル・フーリエに関する研究論文を集めた論文集である。

実際のところ、日本でフーリエがはじめて紹介されてからかなり経つ。ここで詳細にその紹介史を跡づける余裕はないが、知っている範囲で記せば、社会運動史や経済学説史の源流としてフーリエの名を掲げる文献は、日本で社会主義の研究がおこなわれるようになるにつれて増えていった。大正時代に遡るが、一九一五年に『大日本百科辞書』シリーズの一巻として出された『経済大辞書』は、鈴木佐助による項目「フーリエ」を含み、そこではフーリエが「十九世紀の初半期に於ける空想的社会主義者の一人」として紹介され、その労働論が簡潔に紹介されている。[1] 森戸辰男が一九二一年に『近世社会主義思想史』の題名で翻訳したアントン・メンガーの『労働全収権史論』には、フーリエの労働権に言及した一節がある。[2] ただし、全体として見ると、この時期のフーリエ紹介は、シャルル・ジードを経由したものが多い。ジードは一九世紀末頃から協同組合社会主義の理論的指導者になっていたが、フーリエをその源流とみなし、活発にフーリエの紹介をおこなった。一九三〇年には石川三四

郎がシャルル・ジードによるフーリエ撰文集の翻訳（英語からの重訳）をおこない、『社会思想全集』に収めてもいる。また同年には、春秋社の『世界大思想全集』の一巻として、安谷寛一の訳により（おそらくジード編纂の）フーリエの文章の抜粋が刊行された。一九三六年に宮川貞一郎によって訳されたシャルル・ジードとシャルル・リストの『経済学説史』では、フーリエに多くの紙幅が割かれた。[3] というわけで、百年以上も前から、われわれはフーリエについて知らなかったわけではないのである。

しかし、フーリエの思想や考え方をそのものとして検討しようという契機には乏しかった。そのことは、紹介のされ方をみれば、さもありなんとある程度納得できる。労働全収権にせよ協同組合社会主義にせよ、なにかの思想潮流の前史を彩る人名とのみみなされるかぎりで、フーリエに対する関心はその思想潮流そのものの研究にくらべれば、二次的な意義しかもたなかったのである。

そのうえ、欧米においてさえ二〇世紀初頭には、数少ない例外を除けば、フーリエの研究は下火になっていた。フーリエ主義を標榜する最後の定期刊行物である『ラ・レノヴァシオン』が廃刊したのは一九二二年だったが、[4] それ以前からフーリエは、社会運動の理論的支柱というよりも、純粋に学説史的な研究対象になりつつあった。一九二五年にはフーリエの遺稿がフーリエ主義者のもとからパリ高等師範学校の附属機関である社会問題資料センターに移管され、草稿研究をもとにした業績が一九二〇年代にいくつか現れているが、広い社会的注目を集めたわけではない。シュルレアリスムの作家アンドレ・ブルトンは、当時の公式マルクス主義以外の社会主義諸潮流に関心をもっていった過程でフーリエに出会ったが、一九四〇年代のアメリカ亡命期にフーリエの著作集を入手し、旅行中に読みふけっていたという。[5] 逆に言えば、フランスにいた時期には、ユベール・ブルジャン編纂の撰文集などを除けば、フーリエの文献を目にする機会はなかったのである。

つまり日本にフーリエが紹介されはじめた時期、その思想は学説史的研究の対象となりつつある一方で、せいぜい歴史上で位置づけられるにすぎず、ほとんどの人にとっては、内実を欠いた抜け殻のようなものになって

きていた。そして結局のところ、日本の当時の知的関心のなかでもフーリエは欧米の学問の輸入の一部にすぎず、そもそもなぜ紹介が必要か、位置づけを見定めかねていた。せめてできたのは、ヨーロッパの主要な思想のひとつとみなされたものを、殻のまま丸呑みすることだけだった。だから、戦後になって、一九四九年に出版された副田満輝訳の『四運動の理論』（上巻のみ刊行）は『世界古典文庫』の一巻だったし、田中正人が「産業的協同社会的新世界」の訳題でおこなった『産業の新世界』の抄訳も、『世界の名著』シリーズにおいてオウエン、サン＝シモンの著作と抱き合わせで出版されたのである（一九七五年）。

もちろん丸呑みがいけないということではない。むしろ、そういう教養主義は、われわれの理解がまだ追いついていないものへの憧れをうちに宿していたかぎりで、われわれのものの考え方を押し広げ、変形させ、転回させていく可能性をもっていた。しかし、それがただの可能性にとどまっているあいだに、射程の短い目的合理性のみを重んじる態度にとって代わられ、フーリエにたいする関心も薄れていったようにみえる。

状況の変化は、欧米におけるのとおなじく、一九六七年からの『フーリエ全集』の刊行前後にはじまった[6]。この全集は第七巻を除けば一八四〇年代から五〇年代にかけて刊行された全集のリプリントだったが、その第七巻をなす『愛の新世界』がもったインパクトもあって、フーリエがふたたびよく知られる存在になった。その後現れた多彩な業績や原典や研究書の翻訳について逐一詳述することは避け、ここでは重要なものだけを挙げるにとどめる。経済学者の坂本慶一は一九六六年からフーリエの「農業思想」を論じた一連の論文を著した[7]。そして文学者の巖谷國士は、ブルトンのフーリエ論に導かれて、一九七〇年代に『四運動の理論』や「愛の新世界」断片などの邦訳やフーリエを論じた評論を次々に世に出した[8]。一九七五年にロラン・バルトの『サド、フーリエ、ロヨラ』が邦訳された[9]。一九八〇年前後に今村仁司がフーリエの労働論を紹介したのに続いて、一九八〇年代半ばには市田良彦が『愛の新世界』を基礎に据えた新しいフーリエ理解を示した。大塚昇三は一九八〇年代後半からフーリエの経済学に関する考察を断続的に発表した。一九九〇年代にベンヤミン、シモーヌ・ドゥブー、ルネ・

シェレールによるフーリエ論が邦訳された。[10] 二〇〇〇年代以降、福島知己は『愛の新世界』と『産業の新世界』を邦訳した。[11]

しかし肝心なのは、論文集は編まれなかったということだ。それぞれの分野で個別におこなわれた論考はあっても、さまざまな考察をひとまとまりのものとして提示する試みはなかった。しかし、ここまで述べてきたことからある程度示唆され、そしてこの本の全体を通じて強調したいことだが、それぞれの知的関心や時代の文脈から光を当てられたフーリエ像は、彼の一面を示すかもしれないが、その多面性は十分に表現できていない。そして、その潜在的可能性を掘り起こすのに最も必要なのは、多面性の認識なのである。そのために論文集という形式が有効ではないか。それが、このあと述べる原典から出発することと並んで、本書を世に送る理由である。

*

編者は、論文集への執筆を参加者に依頼するにあたって、著作の出版年等最低限の指摘はおこなったが、それ以外に特に統一した指針を示すことはしなかった。訳語の統一もおこなわなかった。著作の訳題を含めて、研究者の解釈の一部と考えられるからである。この意味では、編者がその役割をまっとうしたかは怪しい。

ただし唯一依頼したのは、フーリエその人の思想を取りあげてほしいということだった。というのも、さきほど言及した優れたフーリエ論を別にして、これまでの研究は往々にして、フーリエを論じると言いつつ、フーリエ主義運動や、その後現れたさまざまな社会主義思想にしか関心がなかったからである。もちろんフーリエの思想をさまざまな理論枠組を通じて解釈することは、多様な知的接続を促すという意味で有益だと思う。しかし、この場合は結局のところ、あれこれの外的な文脈にとって都合のよいよう言及するにすぎない。それで思想の理解が深まるだろうか。

例えば、フーリエ主義者たちはフーリエをまるで聖人かのように崇め奉る傾向があったが、それを真にうけてフーリエの意図の善良さを論じても、特に益はないだろう。意図だけを問題にするのは、理論への無理解を裏返しに表明するものにすぎない。一八四〇年代に当時西漸運動のただ中にあった北アメリカでフーリエ主義共同体の建設ブームが起こったり、一九世紀末から二〇世紀にかけてすでに述べたような協同組合社会主義の祖としてフーリエに言及することが起こった。だとすれば、共同体建設や協同組合運動への情熱は、フーリエではなく、それらのフーリエ主義者や協同組合社会主義者に帰せられるべきものだろう。彼らがフーリエの思想をそのような方向から解釈したのが事実だとしても、別の読解の可能性は、フーリエの著作そのものを繙かないかぎり判断できないのである。そして、最も多い例として、フーリエ論を標榜する数多くの文献が、フーリエの「純フランス的な機知」を強調するにせよ、反対に変革手段の空想性を批判するにせよ、エンゲルスがかつて『ユートピアから科学への社会主義の発展』で述べたことをなぞっているにすぎない。要は、わざわざフーリエの名前をださなくても言える程度のことしか言っていないのである。

そうではない。フーリエの著作だけにもとづきながら、そこから何を言えるのか、何を考えられるのかを問うことが、真に重要なのである。

*

本論文集の各論文はそれぞれフーリエの思想の側面を検討するものであるから、全体をご覧頂けるとその多面性や広がりが理解できるように構成したつもりである。しかし、本書ではじめてフーリエの考えに触れる人にとっては、やや専門的にすぎる記述もあって面食らうかもしれない。たとえすでにフーリエを読んだことがあったとしても、『四運動の理論』からフーリエを読み始めた人と、『愛の新世界』から始めた人、あるいは『産業の新